

はしがき

一九八四年二月、冒険家の植村直己は厳冬期マッキンリーの登頂に成功したが、下山途中で消息を絶ち、テレビでは各局が植村の安否を危惧するような特別番組を放送していた。当時小学生だった筆者は、植村直己の名前から知っているが、「北極とかマッキンリーとか、寒いところで冒険をしている人」というくらい認識しかなく、この報道にとくに強い印象をもたなかった。それよりもはるかに強いインパクトを与えられていたのは、同年にリリースされた嘉門達夫の曲、「ゆけ！ゆけ！川口浩！」である。もちろん、水曜スペシャルの『川口浩探検シリーズ』は大好きな番組で、年に数回放送されるこの番組を楽しみにしていた。その他によく観ていた番組は、『兼高かおる世界の旅』（一九五九～九〇年）や、『野生の王国』（一九六三～九〇年）だった。我が家では子どもにはチャンネル決定権がなく（テレビは家に一台しかなかった）、前者は母親のチョイス、後者は父親のチョイスだったが、筆者はいずれの番組もかなり真剣に観ていた記憶がある。いまから考えるに、筆者の「冒険・探検」の体験はすべてマスメディア、とくにお茶の間のテレビによってもたらされていたのだ。

大人になってからも、実際にバックパッカーに憧れるわけでもなく、登山をするわけでもなく、筆者は「冒険・探検」の実践からはほど遠い文化社会学者（メディア研究者）にすぎなかった。だが、あるとき（記憶では二〇一六年の冬）、「冒険・探検研究会」を主宰されている鈴木康史先生（奈良女子大学）から連絡があり、「川口浩探検シリーズ」をテーマにして、論文を一本書いてくれないか」というご依頼をいただいた。おおよそ、筆者は『女子マネージャーの誕生とメディア』（ミネルヴァ書房）など、「イロモノ系」の研究者として知られているので、ありがたく依頼を承諾した次第である。

それをきっかけに、「冒険・探検研究会」に参加するようになり、研究会では様々な冒険家や学者の名前が登場していた。筆者も学者のはしくれなので、今西錦司や梅棹忠夫、小田実などについてはそれなりに最低限のことは知っていた。だが、戦前の福島安正や白瀬轟、戦後の堀江謙一や三浦雄一郎など数々の冒険家についてはほとんど知識がなかった。たとえば、この界限で「カワグチ」といえば決して川口浩のことを指すのではなく、明治期にチベットを探検した河口慧海だという事実も恥ずかしながら初めて知った。さらに、参加者の皆様から様々な未知なる情報をご教授いただく中で、筆者には「戦後史、あるいはメディア史（書籍、映画、テレビ、インターネットなど）を軸にして、冒険・探検についての言説・表象の変容を描き出すことができるのではないか」という、漠然としたアイデアが浮かんだのだ。そもそも冒険・探検よりも、戦後の大衆文化の変容、あるいはメディア史に関心があつたので、筆者がそのような発想に至つたのはある意味で必然だった。

その後、植村直己や堀江謙一、三浦雄一郎など、有名な冒険家・探検家についての言説を調べていくうちに、彼らが多くの人々から支持されていた事実もさることながら、彼らに対してかなり批判的な意見もあり、さらに言えば「誹謗中傷」に近い言葉も散見されることに興味をひかれた。そういった批判の根拠も、時代によって様々なのが現れては消えていく（あるいはまた現れる）のだ。「無謀」「英雄気取り」「社会に役立たない」「無教養」「商業主義」「歴史的な意義がない（二番煎じ）」「単独行とはみなせない」「ヤラセ」など、それらは枚挙にいとまがない。一方で、それが反転して、「青年を体現した!」「素晴らしいプロフェッションナリズム!」「学校教育でも使える模範的存在（努力・忍耐・主体性など）」「ヤラセであっても楽しめる!」など、肯定的に捉えられることもあるのだ。

さらに、メディア論的に解釈すれば、冒険家・探検家は映画スターやスポーツ選手、人気歌手などに比べて、別の特徴があることにも気づいた。どのような有名人もメディアによって広く伝えられ、多くの人々に知られて初めて「有名人」になるという点は共通している。しかしながら、冒険家・探検家は、私たちの日常とはかけ離れた「外部の世界」へ出ていき、未知なるものを発見し、その貴重な経験を多くの「内部の人々」に伝えてくれる。言い換えるならば、彼らはメディアによって社会で知られているだけでなく、「未知なる世界」や「独自の体験」

を私たちに伝えてくれる存在、すなわち「メディアそのもの」でもあるのだ。そのような認識をもつなかで、筆者がこのテーマに対する関心は、さらに高くなっていたのだ。

本書は戦後の日本における「冒険・探検」とメディアの関係について論じたものだが、その構成は「序章」「第一部」「第二部」「第三部」に大きく分けられる。序章では、本書の研究視点であるメディアに関する分析基軸や枠組みをあらためて示し、本書の問題設定を明確にする。さらに、戦前に行われた「冒険・探検」に関する研究を概観し、そこで提示されていた数々の論点を抽出する。というのも、これらの論点は戦後の「冒険・探検」に関する議論にも大きく関わっているからだ。

第一部（第1章、第2章）では、戦前から続く大規模な「学術探検」と、一九六〇年代の小田実や堀江謙一のような「個人の冒険」を比較し、それらが大衆からどのように受け入れられ、消費されていたかを論じている。そもそも「学術探検」は「映画化」されることが多く、その内容は戦前と戦後で表面的には大きな断絶がありながらも、根底では根強い連続性を持っており、第1章ではその点を明らかにする。さらに第2章では、六〇年代に脚光を浴びた小田や堀江のような「個人的な動機」に基づく冒険に注目し、それが大衆や知識人からどのような評価を受けたのか、あるいはその時代的要因などについて論じる。

第二部（第3章～第5章）では、一九六四年に日本人の海外渡航が自由化され、海外への旅が大衆に開かれていった時代の「冒険・探検」について分析する。この時代には、北極・南極・エベレストがすでに人類によって制覇され、「前人未到の地」がほぼ地球上から消えかけていた。そして、日本社会は高度成長期からバブル期を迎え、「冒険・探検」を行ううえでの社会状況も大きく変化し、さらに三浦雄一郎や植村直己などに代表されるような数多くの冒険家・探検家を生み出していた。さらに七〇年代以降、「テレビ黄金時代」を迎え、『川口浩探検シリーズ』のような番組も登場してきた。意外な事実だが、現在では決して「真正な冒険家」とはみなされていない川口浩の冒険番組が、かつては大衆から「真面目な番組」として称賛されていたのだ。三浦雄一郎が海外映画を通して世界的

に評価されたのも、実は日本における邦画の衰退と大きな関係があったのだ。以上のようなメディア状況の変化を追いつつ、三浦、植村、川口浩らに対する評価が時代ごととどのように変容していったのか、その社会的、あるいはメディア史的要因は何だったのかを考え、それぞれの探検行とメディアとの複雑な関係を解き明かしていく。

第三部（第6章～第8章）では、バブル崩壊以降の九〇年代以降の「冒険・探検」に注目し、その「多様化」とメディアとの関係の変化に注目する。テレビに関しては、猿岩石などの芸人がバラエティ的「冒険・探検」に起用されるようになり、多くの若者から支持を得ていた。一方で、二〇〇〇年代以降に新しい発想で冒険・探検を始めたのが、栗城史多や角幡唯介である。それぞれ、どのような形でメディアや新技術に依存し（あるいは依存せず）、自身に特徴的な探検・冒険の形を構想していったのだろうか。さらに、猿岩石や栗城に関しては、彼らの冒険行に対して、メディアの言説空間では様々な称賛や批判が入り乱れていた。では、その批判や称賛の論拠はいかなる点にあり、当時の日本社会やメディア状況とどのように関係していたのだろうか。

以上のような形で本書は構成されているが、読者の中には「こんな人物を冒険家・探検家として取り上げるのはおかしい」と感じる方もおられるかもしれない（あえて、具体的な人物名は出さないが）。選んだ基準は、彼らが冒険家・探検家となし遂げた行動や業績が優れているかどうかではなく、あくまで「メディアとの関係性の深さ」、あるいは「その時代をいかに体現していたか」である。その点に関しては、どうかご理解いただきたい。